

1270年時空越え「171文字」をめぐる問題点を討議

「遣唐使墓誌研究特別プロジェクト」シンポジウム

矢野 建一 文学部教授

昨年(2004年)の10月10日、中国西安市の西北大学が日本古代の遣唐使の墓誌を発見したと発表し、日本でも大きく報じられたことは記憶に新しい。私たちが長安都市文化に関するシンポジウムのために協定校である西北大学付属の博物館を訪れたのは、日程最終日に当たる9月1日夕刻であった。そこで「国号日本と記された古代の墓誌を収集した」と聞かされた時も「まさか、そんなことは…」と思われた。

墓誌は薄暗い研究室の片隅に無造作に置かれていた。文字は40^号四方の灰青色の石面に薄く浅く刻まれていた。かすかな明かりを頼りに読み進むうち、全身に戦慄が走るのを覚えた。古代史研究者の末席に連なるとはいえ、遣唐使の専門家ではない私にも、墓誌のもつ重大性が理解できたからだ。誌文の上部は欠損し、文意のとりにくい箇所もあったが「公の姓は井、字は真成、国は日本と号す」、「開元廿二年正月口日を以て、すなわち官弟に終わる、春秋卅六」、「形はずでに他土に埋むとも、魂は故郷に帰ることをこい庶ねがう」と読み取れた。その場では井真成なる人物は思い当たらなかったが、日本の遣唐使を考古学的に証明する最初の資料に間違いないと直感した。また井真成は、開元廿二年(734)正月に36歳で唐土に客死したとあるところから、養老元年(717)の遣唐使とともに入唐した留学生であろうと思われた。養老の遣唐使は、阿倍仲麻呂、吉備真備、僧玄昉など奈良朝の政治文化史を彩るきら星のごとき俊英たちが留学したことで知られる。もし井真成が生きて日本に帰ったならば、おそらく古代史に名をとどめる人物となったであろう。なんとか彼の足跡を明らかにしなければ、との思いが募った。

私たちが、ふたたび西北大学を訪れたのは、マスメディアへの公表を1週間後に控えた10月3日のことであった。両大学による墓誌の共同研究プロジェクトの立ち上げと、日本で予定されるシンポジウムの打ち合わせ、そしてできれば墓誌の里帰りを関係機関に強く働きかけるためであった。墓誌はガラスケースに収められ、研究室から展示コーナーへと移されて、1270年の眠りから醒めるのを待っているかのようであった。

マスメディアの報道は予想した通りセンセーショナルなものであった。しかし、その関心はあまりに「井真成とは誰か」という点に偏り、時空を越えてもたらされた情報の広さと深さを学問的に共有するには至っていないように思われる。

今月の28(金)と翌29(土)の両日、墓誌の収集と研究を直接担当してきた4人の西北大学の研究者が来日し、専修大学主催・朝日新聞社共催によるシンポジウム(9時半開場・朝日ホール)と市民セミナー(12時開場・神田校舎303号教室)が開催される。本学4人の研究者のほか日中交渉史や唐代史の第一線の研究者3人も参加し、171文字をめぐる問題点が報告・討論される予定となっており、その成果が期待される。

英語による国際交流特別講演会

外国人2講師を迎え生田キャンパスで開催

12月、2つの英語による国際交流特別講演会が生田キャンパスで開催された。



▲講演すオトゥール氏(右)と室井教授ら

16日は、フランシス・オトゥール博士(ダブリン大学トリニティカレッジ)が講演、「アイルランド経済の近況」について国際経済学科室井義雄ゼミ生ら学生47人が傾聴した。松井明夫くん(4年)が日本語に通訳した。

1987年を境にアイルランド経済は急成長を遂げている。オトゥール氏は、その活況の要因(企業支援や税率引き下げなど政府の斬新的な財政・金融政策、女性の進出を含め、教育程度の高い柔軟な労働力の創出、EU加盟、海外からの直接投資など)を挙げ、同時に貧富の差が拡大するなど「アメリカ化」の傾向にある問題点も指摘した。質疑も活発で、「住みよい国ナンバー1と言われるアイルランドの印象がかなり変わった」などの感想が寄せられた。



▲シェークスピアについて講演するリー氏

10日には、英ブリストル大学のジョン・リー博士を迎えシェークスピアについての講演会が開かれ、英語英米文学科生ら117人が出席した。

2月に代官山で「コウサ展」

ネットワーク情報学部生 初の学外展示



ネットワーク情報学部の有志が、学部で学んだ成果を発表する「コウサ展」を2月5(土)、6(日)の両日、東京・代官山ヒルサイドテラスで開く。14グループ延べ100人が参加するこの企画は育友会奨励賞も受賞。専大生「初の企画」に注目が集まっている。

4年次生の湯浅暁生くん、小西秀典くん、前川洋二くんが中心となり企画。「美大などで行われている卒業制作に刺激を受け、学んだことを外部に発信したかった」と前川くん。「コウサ展」というユニークな名称は「学部の三つのコースが交わって発信すること」、「卒業生がこれから進んでいく道が交差する」という二つの意味を込めたという。「専門知識がなくても楽しんでもらえる展示です。映像系・システム系・経営系と学びの幅の広さを見てもらうことで、ご父母や高校生にも学部を理解してもらう絶好の機会になります」(小西くん)。

約15人の実行委員は、学年末試験の合い間を縫って最後の仕上げに取り組んでいる。「2・3年次生も参加しているので、コンセプトは引き継がれると思う。学生の方で『実現する』という自信につなげてほしい」と実行委員を束ねる代表の湯浅くんは話して

いる。シンプルかつ大胆なデザインの案内状は2年次の尾崎仁美さんが担当した。

健闘！ 安平 一樹くん(法3)

第54回全日本学生法律討論会



▲表彰される安平くん(左)

第54回全日本学生法律討論会(主催・全日本学生法学連盟、後援・法務省、最高裁、最高検、日弁連ほか)が12月4日、高松市の高松商工会議所で開催された。本学からは安平一樹くん(法3)が参加。優勝こそ逃したものの立論の部3位、質問の部2位と健闘した。安平くんは「関東大会ではおさえた早大、立教大にリベンジを許してしまい非常に悔しいが、少ない人数の中でこの結果を出せた」と話している。

全日本学生法学連盟は関東、関西、九州四国の3つの学生法学連盟から構成され18大学が加盟。同討論会は選ばれた上位10校が立論をし、全加盟団体の代表が質問。高レベルで激しい討論が繰り広げられる。今後も好成績が続くよう努力していきたい。(伊藤匠・法2)

英語力をつける読書ガイド<9>

第英語思考を誘発する本 田邊 祐司(文学部教授)

『和文英訳の修業』(佐々木高政 著 文建書房刊、1991年、1,785円)



これまで音読と文の本を紹介してきましたが、小生担当の最後は「書く英語」の本で締めます。

若いころは「話す英語」が一番難しいと思い込み、それが目標でした。でも今、何が難しいかと問われれば、即座に「書く英語」と答えます。「書く英語」は永遠に残ります。はかない(ephemeral)「話す英語」とは違い、それには怖さがあります。

本書との出会いは大学3年。通訳のまねごとをしていた筆者は、話し言葉の「ゆるさ」に身をゆだね、適当にお茶を濁す体たらく。そんな若者に次に進むべき段階を示してくれたのがこの名著でした。

本書は「予備編」「基礎編」「発展編」の3部構成。「予備編」には「基本文例集 500」があり、和文をみて即座に英語ができるかの自己分析ができます。「基礎編」には「英語ら

しい英文」のこつが満載。その中の「予備練習」(書き換え)と「研究問題」にある「考え方」を通して、訳出への視点が身につきます。「考え方」では例えば、「夜、ものを食べると胃にもたれやすい。」が、なぜ「Food at night is likely sit heavy on our stomach. 」となるのかのプロセスが丁寧に示してあります。「発展編」は挑戦セクション。「添削例」と3通りの「訳例」と自分の英文を比較することによって、思考回路が活性化されます。

頭と口と手を使って、実際に紙に試訳を書き、推敲を重ねる。そのような思考の繰り返しの機会を、これからの学習過程のどこかで与えてください。それは『英語教育』(大修館)の「和文英訳演習室」担当者としての信念でもあります。本書はそのための格好の「誘発剤(?)」です。

【ニュース専修2005年1月号4面】